

# H14年度 複合的資源管理型漁業促進対策事業（抄録）

森 啓介・池脇 義弘・吉見 圭一郎・廣澤 晃

徳島県海域を、播磨灘・紀伊水道・太平洋の3海域に分け、各海域の漁業実態に即した「資源管理型漁業」を推進するための調査を行った。調査結果の詳細は、『平成14年度 複合的資源管理型漁業促進対策事業報告書』を参考にされたい。

小型底びき網漁業についての取り組み（播磨灘および紀伊水道海域）

本県において播磨灘および紀伊水道の基幹漁業である小型底びき網漁業を対象に事業をおこなった。

漁獲統計調査では、資源管理対象魚種について主要漁協の漁獲統計を把握し、管理効果のモニタリングを実施した。

漁獲実態調査では、標本船日誌調査および水揚げ量調査により小型底びき網漁業の漁獲実態を把握した。

小型底びき網漁船の減船効果把握調査では、紀伊水道で実施の検討がなされている小型底びき網漁船減船の効果の推定をおこなった。効果推定の指標種としてはクルマエビを選び、本種の資源解析を実施するとともに、減船後の資源量および漁獲量の回復についてシミュレーションをおこなった。

瀬戸内海機船船びき網漁業についての取り組み（紀伊水道海域）

瀬戸内海機船船びき網漁業(以下「パッチ網漁業」という。)の操業状況を整理した。また、前年度に引き続き異なる網目の袋網で操業した際の漁獲物を比較し網目拡大効果を検証した。今年度は網目拡大が未実施である阿南地区に場所を移し、展示効果をねらい実施したものである。更に、シラスが網目から逸出する状況を観察する目的で、潜水しビデオによる撮影を行った。加えて、漁場形成の状況を把握するための基礎的試験を行った。

操業状況の整理については、農林統計及び主要漁協統計によりパッチ網の操業状況をとりまとめた。また、標本船日誌により操業並びに漁獲状況を把握した。

網目拡大効果の検証については、網目拡大実施に伴う効果の検証及び網目拡大効果の展示と拡大を目的として行った。4統のパッチ網に網目の異なる(200,220,240,260径の4種類)袋網を付け同時間同海域を操業し、漁獲されたシラ

スの品質及び漁獲量等を検討したものである。

また、各網目による製品について、仲買人に評価を依頼した。曳網は7月6日に2回行った。

漁獲物重量については、第2回曳網の260径を除き、網目が小さくなるほど小さくなった。第2回曳網の260径では、網の破損による漁獲物の散逸の可能性が疑われた。

カタクチイワシは、第1回・第2回曳網とも、また重量比、個体数比とも優占していた。獲物中に占めるカタクチイワシの比率は、第1回曳網では重量比83-98パーセント、個体数比67-96パーセントであった。第2回曳網では重量比96-99パーセント、個体数比89-99パーセントであった。網目による組成の違いについては、特にはっきりした関係がみられなかった。

カタクチイワシの平均全長については、網目が小さいほど小さかった。ただし、200径についてはその傾向が当てはまらず、いずれの曳網でも220径より小さかった。また、カタクチイワシの全長モードは、網目が小さくなるほど小さい傾向がうかがえた。

製品の歩留(乾燥後重量/生重量)と網目の大きさについては、明確な関係はないものと考えられた。

単価については、200径を除き網目が小さくなるほど低下する傾向がみられた。

今年度は新しい試みとして、製品評価を加えた。網目拡大の主目的は漁獲物の品質向上であることから、製品について客観的な評価を行うことは意味のあることである。結果的には、網目の大きい方がほぼ高い評価を得た。データの精度を高めるためには複数の者による評価を行うべきであるが、今回は製品数量が小さい等の理由で実施することができず1人による評価となった。

騰煮・乾燥を行う経営体は網目拡大を実行済みの和田島地区に所属しており、未実行の地区の経営体についてはそのほとんどが鮮魚で出荷している。これらの地区についても、今後販売時の単価を押し上げる条件を把握し、この単価向上に向けた取組を行っていくことは有意義なものであるものと考えられた。

以上から、資源管理方策の一環として行っている網目拡大については、その本来の目的である商品価値の向上をある程度実現していることが前年度に続き確認された。

潜水観察を行った結果、次の知見が得られた。水平方向

からみた曳網中のコッドエンドは、末端部から網口方向へ10メートル程度の部位で海面に向かって2メートル程度立ち上がる形状を示していた。シラスの多く逸出する部位は、網の上面のうち海面に向かって最も立ち上がった部位から網口方向へ数メートルまでの部位であった。これは、コッドエンドが先述の形状を示すことで、シラスが逸出の多い部位周辺の網内に集積し、逸出するためであると思われる。

逸出したシラスは、海底に向かって泳ぎ去るもの、逸出した付近に滞留したり海面に向かって移動するものに分けられた。後者は、主に活発に遊泳しないシラスであり、罹網や逸出による魚体への影響で遊泳力を失ったものと考えられた。逸出したシラスの再漁獲は目合拡大の展開にとって重要であることから、今後は逸出したシラス生残率の把握等を行う必要があるものと考えられた。

多種類の漁業が組み合わさった営漁形態についての取り組み(太平洋海域)

漁獲統計調査では、資源管理対象魚種をモニタリングするため、モデル地区(牟岐地区：牟岐東および牟岐町漁協)の月別漁獲統計を集計した。有用藻類の増養殖試験では夏季にクビレツタを、冬季にマコンブの導入を検討した。

クビレツタ：2カ月間のかご養殖をおこない、昨年度同様に50 gの原藻から3 kg以上のクビレツタを収穫できた。かご養殖は簡便で効果が高く、現場における実用的な方法と判断された。また、冬季における原藻の維持・管理も容易であった。現場への導入時にさらに経費を削減することが可能と思われた。

マコンブ：マコンブの幼体をロープに差し込んで試験をおこなった。これらは3月末までに2 m程度に成長したので、漁業者が刈り取ってアワビ漁場へ散布した。